

地球上の岩石の多くはマグネタイトやヘマタイト、あるいはマグヘタイトといった磁性鉱物を含んでおり、普通の磁石(マグネット)に比べると非常に弱いが安定な磁化を持つことがある。磁気テープやフロッピー・ディスク上の磁性粒子がさまざまな情報を記憶するように、岩石中の磁性鉱物も過去の地球磁場の記録を保存することができ。私の学ぶ古地磁気学は、岩石の残留磁化をてがかりとして過去の地磁気方位や強度を明らかにしようとする学問である。古地磁気の研究によって、双極子磁場の逆転や大陸移動などの現象が解き明かされてきた。ここでは、私たちのおこなってきた日本列島の移動と日本海の拡大に関する研究を紹介しよう。

東海、近畿、中国地方のいくつかの盆地に、第一瀬戸内累層群とよばれる堆積岩が分布している。これらの地層は、一七〇〇万年前から一五〇〇万年前にかけての時期に、現在の瀬戸内海のような浅海の環境で堆積したものである。そのなかでも地層の構造や年代がよくわかっていている三重県の一

志層群や岐阜県の瑞浪層群の岩石の持つ残留磁化を調べてみると、磁化の水平成分の方位が南北方向から東へおよそ四五度ずれていることがわかった。磁化の安定性についてのいろいろな実験の結果、安定な磁化

### 岩石の磁化と日本海の拡大

林 田 明

成分は地層の堆積時に獲得された初生的なものであることが示され、東偏した残留磁化の方向が当時の平均的な地球磁場の方位を表すことが確かめられた。

地磁気は地球中心の磁気双極子のつくる磁場に近似できるが、その双極子の方向は地球の自転軸にほとんど一致したものである。そのため、磁石(コンパス)の針がほぼ南北を指すことになる。それでは、なぜ約一六〇〇万年前の地層の磁化方位が東への大きな偏りを示すのであ

うか。同じ時期のアジア大陸の岩石は、ほぼ南北の方位の残留磁化を持っている。これらのことから私たちは、第一瀬戸内の分布地域を含む日本列島の西南部がアジア大陸に対して時計回りに回転しながら移動したと考えた。最近になって得られた西南日本の古地磁気方位をまともてみると、一五〇〇万年前よりも古い岩石はいずれも東偏した磁化方位を持つことがわかる。それに対して東北地方の同時代の岩石は、西に偏った磁化を持つ。東北日本は、西南日本とは逆に反時計回りの回転をしたらしい。

日本列島の約一億年前の火成岩類の磁化が西南日本と東北日本とで異なる方位を持つことは、すでに一九六〇年代に川井直人らによって発見されていた。彼らは、かつて直線状であった列島が約一億年前に屈曲したという「日本列島の折れ曲がり説」を提唱した。最近の私たちの研究は、西南日本の回転が約一五〇〇万年前に、しかも急激におこったことを示している。残留磁化の測定技術の進歩や放射性核種や微化石をもちいた年代測定の充実を背景に、より信

## 「私の研究」

傾度の高い古地磁気方位が得られるようになった。その結果、日本列島の折れ曲がり  
がこれまで考えられていたよりもかなり新  
しい時期に、より大きな回転角度でおこっ  
たことを明らかにできたのである。

西南日本や東北日本の回転はなぜおこっ  
たのだろうか。古くは一九二〇年代に寺田  
寅彦は、日本列島がアジア大陸から分離し  
て日本海が形成されたという考えを持っ  
ていた。彼は、当時ウエゲナー (Alfred  
Wegener) の主張していた大陸移動説に感  
銘を受け、日本列島の漂移説を思いついた  
という。大陸移動説の復活や海洋底拡大説  
の登場を経て、一九七〇年代には日本列島  
の折れ曲がりとは日本海の拡大とが関連して  
議論されるようになった。日本海も、世界  
の多くの縁海と同じように、沈み込み帯の  
背後で新しい海洋底が拡大することによっ  
て形成されたと考えられてきた。しかしな  
がら、深海掘削や地球物理学的な観測から  
は日本海の拡大の時期や様式についての明  
確な結論は得られないままであった。最近  
の古地磁気資料から明らかになった西南

日本の回転の様子は、日本海の西南部が朝  
鮮海峡付近を要として扇が開くように拡大  
したことを示唆している。大陸地殻の一部  
がアジア大陸から引き裂かれ、背弧海盆の  
拡大ともなって回転しながら移動した。  
現在のような形の日本列島とその背後の日  
本海が誕生したのは、約一五〇〇万年前の  
ことであったと考えられる。

日本列島の回転をもとに戻すことによっ  
て、日本海が拡大する以前の様子を復元す  
ることもできる。西南日本のアジア大陸に  
対する回転角度は約四五度と推定される。  
そこで、対馬付近を中心として日本列島の  
西南部を反時計回りに四五度だけ回転させ  
てみると、日本海西部の対馬海盆や大和海  
盆を閉じることができる。西南日本は韓半  
島のすぐ東に位置することになるが、本州  
とアジア大陸の海岸線の形はうまく適合せ  
ず、間にすきまがあくようにみえる。しか  
し、現在の日本海の海底に存在する大和堆  
や朝鮮海台など大陸起源と思われる地塊を  
あてはめると、そのすきまを埋めることが  
でき、ジグソーパズルが完成する。

およそ一五〇〇万年前に拡大した日本海  
は、いま閉じようとしているらしい。北海  
道や東北地方のすぐ西側で日本海の海底が  
日本列島の地下にむかって沈み込み始めて  
いることが、やはり最近になって明らかに  
されたのである。日本海東縁での沈み込み  
が続いていくと、日本列島はふたたびアジ  
ア大陸と陸続きになるかもしれない。地球  
上の陸や海も時間とともに姿を変えてい  
く。われわれが直接に目にすることができ  
る空間と時間は宇宙のごとく限られた領域  
にすぎないが、人間の好奇心や想像力はそ  
の限界を越えて過去や未来へ、地球の内部  
や宇宙へとひろがっていく。

(大学工学部助教)

×

×

×

私は一七世紀イギリスのピューリタン詩人ジョン・ミルトンを専門に勉強している。大学院入学直後、「修論のテーマに何を選びますか？」というアンケートを受けて、メ切りまでのわずかの日々さんさん悩み、迷った末選んだのがこの作家ミルトンであった。学部での授業を通して英文学への興味をかき立てられ、その自信も見込みも全くないまま、「将来、出来れば研究職につきたい」という希望を漠然と持っていたものの、当時の私はまだ特定の作家を研究対象に考えてさえいないほど、今考えるときとまことに暢気な学生だったものだ。しかし、「せっかく勉強するのなら、今後もずっと興味を持って研究を重ねていきたい。そのためにも、巾の広い研究の可能性を持つ奥行き深い作家、自分の考え方や生き方に好ましい刺激を与えてくれるような作家を、ぜひとも選びたい」と思い、この時ばかりはさすがに慎重になって、ない知恵をしぼり四苦八苦したのである。

結局私は研究作家の欄に「ミルトン」という名を書き入れて、そのアンケートを提

出したわけだが、学部時代に興味を持ったさまざまな作家の中から、特に彼の名が浮かび上ってきたのはなぜだろう。それには、先に挙げた私なりの選択規準——作家としての大きさと人間的な度量——もさることながら、学部四年次に、当時の女子大学長、越智文雄先生から受けた「ミルトン研究」の講義の影響が、少なからずあったからだと考えられる。ラテン語に精通されミルトンの権威として知られていた先生が、朗々とした声

## 『失樂園』にひかれて

小山 薫

で自信を持って語られる講義には迫力があ

ス』の持つ若々しく瑞々しい感性に強くひかれ、その背後にある西洋文化の重みに魅了されてもいたのである。

こうして私はミルトンと深く関わるようになった。それ以来私の書いたささやかな論文はすべてミルトンに関するものであり、私は文字通り「ミルトン」を専門に勉強してきたことになる。しかしその過程で、ミルトンという作家およびその作品に対する私の思いには、かなりの変化があったことは確かであろう。かつては初期のラテン詩や前述の『コーマス』などに代表されるルネッサンス的な感性に支えられた作品、ミルトンの若さや思いがけない柔軟性が直接伝わってくるような作品を好ましく思い、例えば、ローマ神話の恋愛の神キューピッドに翻弄されて報われぬ恋に苦しむ、という設定で自らの恋愛体験を描いた「エレジー」第七番などに、大いに新鮮な魅力を感じていたのだが、今はやはり、詩人としてのミルトンの本領は晩年の作品にこそ見るべきだ、と素直に思えるのである。

## 「私の研究」

それは私が彼の代表作『失樂園』の熱烈な読者となつたせいであらうか。ミルトン・アンと称されるごく一部の人を除き、今では一般の人氣をほとんど失つてしまつたとも言えるこの作品に「ひかれてゐる」と言つても、私の貧しい言葉と説明では、同意してくれる人どころか、はたして本気で信じてくれる人がいるかどうか全く心もとないのだが、しかし確かに私はこの作品にたまらなくひかれてゐるのである。

現代人の目から見ればプロットそのものには何の変哲もない、ということとは間違いないであらう。人類の始祖として神に創造された男と女——この世で最初の夫婦——が、狡猾なヘビの誘惑によつて禁断の木の實を口にし、神に追放されてエデンの園を出る、という「創世記」第一―三章の有名な記述を下敷きにし、「永遠の摂理を主張し、神の道の正しさを人々に示すために」『失樂園』第一卷二五―二六行）書かれたのが、この作品なのだから。

しかしその結末に至るまでのアダムとイヴの人間ドラマは、妙なままなまじさを持

つて語りかけてくるのである。私は墮罪以前の二人が神の溢れんばかりの祝福に支えられ、無防備なままであつたらんと愛の世界に浸り至福を樂しんでゐる姿を見ると、セイタンではないが本当に羨ましいと思ふし、また同時に、現代の世の中でおざりにされがちな單純なもの、素朴なものに対する憧れを蘇らせずにおれない。そして墮罪後の二人が肉欲に溺れ、続いて醜い責任のなすり合ひをした後、神の恩寵が働き、イヴの猷身的な態度とアダムの勇らしさが回復されて、美しい和解の場面を迎えるくだりになると、胸がつかまつてそこからほつとするのである。

国と時代をこれほど異にしながら、私はミルトンの作品を読み、自分なりに感銘を受け、そしてわずかな力の中で何とか理解しようとしてきた。小手先の文才ではなく、信仰に支えられ祈りの中で創作したこの偉大で真摯な作家のメッセージを、これらの研究生活がはたして私にどれだけ伝えてくれるであらうか。以前はその存在の大きさに畏縮して、「とても太刀打ち出来

ない」と悲觀的になつたこともあるが、今は「道は長い、自分なりにせいぜい頑張ろう」という、ほとんど居直りの心境になつてゐる。

さて、アダムとイヴが手に手をとりにエデンの園を出て行く『失樂園』の結びのシーンに、私は未だに涙がこぼれてならないことがあるのだが、この場面で二人の道案内となるのは「プロヴィデンス（神の摂理）」である。実はこの秋からアメリカで在外研究させて頂く予定になつてゐるのだが、その折に私がお世話になるブラウン大学の所在地が、ロード・アイランド州の州都であり、偶然にも「プロヴィデンス」という名であることを知つた時は、少なからず驚きもし、またとても心強く思つて嬉しくなつたものだ。アダムとイヴならず、ひとり孤独に異国に足を踏み入れることになる私だが、「プロヴィデンス」という強力な道案内を得て勇氣百倍、精一杯研究に励んできたいと思つてゐる。

（女子大学専任講師）

私の目下の研究テーマは近現代の日本経済史、とくに戦間期を中心にした農村史である。

戦前の農村は、大小の地主がおり、農民も自作農のほか多くは地主から土地を借入れた小作農民として存在する階級・階層社会であった。そのために、資本主義の展開、なかんずく第一次大戦後の重化学工業の本格的展開に応じて、農村では「小作争議」の形をとった地主小作の階級対立をはじめ、農民層の種々の権利主張を基礎にした社会的・政治的諸運動が展開する一方、国家もそれに対して農村安定化のためにさまざまな政策・施策を講じなければならなくなった。このように流動化した農村の状況を、小作争議ないし、農会や産業組合の農業団体の展開、あるいは昭和恐慌期以降農村秩序立て直しのために大々的に展開される経済更生運動等の広義の農村社会運動の経済的・社会的条件と担い手およびそこに貫く原理と論理をそれぞれ確定しつつ、国家の政策的対応との関連で明らかにして、最終的に「戦間期日本の国家と農

村」という国家の農村支配体制論に問題を収斂させていこうというのが、私のこれまで行なってきた具体的な作業であり、また自分ではもう少しで可能だと思っているまとの方向に関する見通しでもある。

先行の論争や業績にこだわるとい  
うこと

庄 司 俊 作

この小文では、「私の研究」に対する自分なりの意味づけが求められているのであろう。その要望にどこまで応えられるか分らない。また、これは研究の意味というよりもおそらく研究姿勢に関わる問題であろうが、つね日頃考えて

いることの一端を述べて責めをふさぎたいと思う。それは、先行の論争や業績の受けとめ方に関連する問題である。

私の研究テーマである戦間期農村史では、戦前期以来の研究の長い歴史とぶ厚い

蓄積を持っている。有力な論争がいくつもあり、また優れた体系的見解もさまざまな分野から既かなり提示されている。それだけに、当該テーマをあえて専攻領域とする者には、そのことに起因する固有の難しさが伴う。それは、過去の論争や業績に対して自己の研究の位置と意味をいやでも意識せざるをえないことである。もちろんそうでなければ一歩も進まないということではない。とくに現在のように研究が細分化し、高度な実証密度が要求されるようになれば、研究の間隙をぬって地道に作品を仕上げることはある程度までは可能である。しかしながら、それなりに研究を積み重ねそれに一定のまともをつけるとなれば、戦間期農村史の現水準においてはやはり過去の論争や業績との理論的な対決は避けえないことになっている。

戦間期農村史は一九六〇年代以降、地主的土地所有・農民運動・農業団体・経済更生運動等の個別テーマについて事例研究の形で着実な成果をあげてきた。だがその反面、他の研究分野の例にもれず、研究の個

## 「私の研究」

別分散化が顕著に進み、それらの成果を全体として総括する視点が見えてこないという困難に直面しているのが現状である。研究がこのような形になる以前つまり一九五〇年代いっぱいには、ごく大まかに言って、農村研究があらゆる社会科学において花形であり、またその議論の中身においても相互に一定の共通認識がバックボーンとしてあり、その点でおしなべてかなりバイアスのかかった議論になっていた。さらに遡って戦前期においては、一九三〇年代に有名な「日本資本主義論争」というのがあった。この論争の中心的な論点は、経済レベルでは「日本資本主義と農業問題」との関連、とくにそれを地主制との絡みでどう捉えるかにあった。

何も戦前期農村史に限らないことだが、研究の展開というものはどうも、始めに枠組論や、実証はアライが極めて体系的な議論がまずあって、それから個々の論点について緻密に詰めを行なうという経過を辿るようである。戦前農業・農村の研究はまさにそのような展開の典型であると言える。

問題は、枠組論や体系的な議論で問題にされたことが、その後の実証的な事例研究に正しく受け継がれ、真に問題の解決が図られるかどうかである。こうした意味では一九六〇年代以降の農村史の研究も多分に反省すべき点があった、というのが私の見方である。そしてそのことが延ては、私の見るところ、上述のような現在の研究の困難を生んだ一因にもなっている。

日本資本主義論争なんて古い、今さらそれを意識するなぞ、遅れているし馬鹿げている、という見立ては当然であるであろう。また、あたかも、日本資本主義研究が農業研究であったり、あるいは日本社会研究が農村研究であるかのような感があった研究の偏りは、一九六〇年以前の研究における速やかに克服されるべき重大な難点であった。このように問題はたくさんあった。しかしそうはいっても、農業問題ぬきの日本資本主義論が登場したり、農村研究でも地主制にほとんど関心を払わない研究が出てくるのは、過去の研究の正しい継承の結果とは言えない。また、一九六〇年代以前

農村研究では、日本の近代化「民主化の実現」という問題関心から部落「むら」共同体に対する関心が非常に強かった。それにひきかえ、六〇年代以降は一転して部落の問題はほとんど抜け落ちる。近代化論に対する反省からであるが、これも今から考えると単なる裏返しの問題があった。

私の当面の関心は、これまでの貧しい実証研究を一定の体系的のもとに総括することである。実証的な作業をする場合も、自分では研究史をそれなりに意識し「構えは大きく」問題を立ててきたつもりであるが、それらをいざ総括するとなると、当然理論的な規程が必要である。近年、経済学や歴史学の分野では刺激に富む新しいパラダイムが次々に出されてきている。必要であればそれらの新しい見方を積極的に取り入れる柔軟性を持つと同時に、他方、一九六〇年代以前の農村研究の批判的・発展的な継承ということに徹底してこだわらぬ良い意味での頑固さも非常に大事なように、私には思われるのである。

(大学人文科学研究所助教授)